Glory Of Light

容疑者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇｌｏｒｙ　Ｏｆ　Ｌｉｇｈｔ

【Ｎコード】
Ｎ４９４８Ｈ

【作者名】
容疑者

【あらすじ】
かつてこの世界アールワールドには二つの種族が共存していた。一つの種族は人間という。知識に溢れている。もう一つの種族は異間という。この二つの種族が平和に共存していた。しかしある日、その平和は破られる。空に突然、星が現れる。魔物の住む星だった。魔星と名づけれた。人間は異間にこういった。「異間よ。魔星住んでくれないか。」もちろん異間は反対した。いろいろな話し合いの結果、結局、異間は魔星に住む事になった。しかし異間が魔物を率いてアールワールドを襲った。魔星に住ませた復讐だった。最初は

圧倒的に異間が勝っていたが人間は知識を使い見事、異間に勝利した！これら「魔星戦争」と呼ぶ。そして幾千の時が流れた。

第一話「目覚め」（前書き）

表現が下手です。

第一話「目覚め」

ここはある家の部屋。
一人の青年ベットで眠っている。

青年が眠たそうにしながら目を開ける。
「ふぁーーーよく寝た。」
そして青年はベットから降り、立ち上がる。
髪の色は青と紫を混ぜた感じ、髪の毛は前に短く後ろに長い。
服は白と黄色を混ぜたような服。
そうこの青年の名はランス
ランスは部屋を出て、階段かけ降りる。

そこには一人の男、
髪の毛の色と肌の色は黒く、
服は普通だがところどころ、汚れている。

「起きるの遅い！」
「ごめんなさい。」
男がそう怒り混ぜ言い放った後にランスが申し訳なさそうに謝る。

「すまないな。朝から怒鳴ったりして。」
今度は男が申し訳なさそうに謝る。
「いいよ父さん。」
ランスが慰めるかのように言う。
どうやらこの男はランスの父であるようだ。

「ランス。今日が村に居れる最後の日ではないが今日は楽しむのだぞ。」

「父さん。確かに今日が僕がこの村に居れる最後の日じゃないかもしれないけど、
だからと言って早く起きなくても。」
ランスの父が助言のように言う。それに対して反抗するかのように言うランス。

「そうかお前が兵士か・・」
「そうか明日、朝早くに出発するんだね。」
ランスの父が少し寂しげに言うと、ランスが確認するかのように言う。

「母さんが聞いたら反対するだろうな。」
「お前の母、メリーは本当に優しくてな。
優しさは誰に負けていなかった。
ランスの父が語るかのように言う。
「あ、すまないな。明日、旅立つというのに。」
バーベルがはっと我に返ったように言う。
「いいよ父さん。母さんの墓参りだけは絶対に忘れずにするから。」
ランスが自信を持ちながら言う。

「ところでランス。今日、予定はあるのか？」
「別にないよ。」
バーベルがランスに問いかけにランスが普通に答える。

「ならあいつと勝負でもしてきたらどうだ？」
バーベルがランスに問いかける。
ランスがしばらく考える。

「そうだね。そうするよ！」
ランスがひらめいたかのように言う。

「戦うには武器が要るな。受け取れ！」
「ありがとう父さん。父さんが武器屋で良かったよ。」
ランスの父が槍を渡すとランスが喜びながら言う。

「んじゃ行って来い！」
「行ってくるよ！」
バーベルに答えるかのように言うランス。彼の顔は少し嬉しそうであった。
そうしてランスは家のドアを凄い勢いで開け出て行った。

第一話「目覚め」（後書き）

初めての小説です。
人の紹介します。

ランス
１７歳
身長１６０ｃｍ
バーベルの息子。
真面目な性格で一人称は僕。
好きなものは槍で戦う事。嫌いなものは悪い事。
槍を使い戦う。

バーベル
３５歳
ランスの父親。
荒い性格をしている。普段のはランスの事を怒ってばかりだが
本当はランスの事を大事に思っている。
武器屋である。

この二人だけです。
呼んでいただきありがとうございました。

第二話「決着」

「さてあいつはどこかな？
あいつの家に行って聞いてみよう。」
ランスが自問自答している。
普段、真面目な彼があいつ呼ばわりするので、相当親しいのだろう。

ランスの言「あいつ」の家向かう途中・・・
「ランス君じゃないか！」
一人の若い男が話しかけてきた。
「村長。こんにちは。」
ランスは話しかけてきた村長に普通に返事した。

「ついに明日だな。」
「兵士になる話ですか？」
「そうだ。」
村長の言っている事を確認するランスの質問に答える村長。

「あなたなしでは今の僕は存在してないですよね。」
「そうだな、私が君に槍を教えたのだから。」
ランスの確認するように言うと村長が自慢げ言う。

「ガイン村の恥にならないようにな。」
「村長～」
村長がふざけた顔で言い、ランスがそれに呆れた顔で返す。

「まあ存分に戦ってこい。」
「はい！」
村長の力の入った言葉にランスが答えるかのように答えた。

「それでは。」
ランスは村長と別れた。

そしてランスは一つの家に前に着いた。
どうやらがここがランスが言うあいつの家らしい。
「こんにちは。」
という声と共にドアを開けた。

「あら、ランス君じゃない。」
おばさんが話しかけてきた。

「あ、ライバーのお母さん！どうも。」
ランスは答えた。

「あの、ライバーは？」
ランスがライバーの母に聞いた。
ちなみにライバーとはランスが言うあいつであるようだ。

「ああ、ガインの森だと思うわ。」
「ありがとうございます。」
ライバー母の言葉を聞くと、ライバーの母に礼をするランスだった。

ガインの森に到着したランス。
木がたくさんありほとんど影になっているが
葉と葉の少しの隙間から光が漏れている。

「久しぶりだ。ライバーとよくここで戦ったの思い出すよ。」
ランスが一つの木を見ながら言う。
その木には一つ大きな傷があった。

「ライバーはここにいないみたいだ。奥に行ってみよう。」
ランスが誰もいない所で嘆いている。
ランスは森の奥に向かって歩いて行った。

森の奥に近づいて行くにつれ声が聞こえてくる。
そこにいたのは金髪で前に後ろにも髪の長さが均等の少年。
身長はランスとあまり変わらない。
槍を持ち前後に突き出している。

「はあ！はあ！はあ！」
威勢のいい声が聞こえてくる。

「やあ、ライバー。」
ランスが挨拶をすると

「おお、ランスか。」
ライバーが軽く答える。

「ついに明日か。本当に行ってしまうのか？」
「本当だ。確かに村を出て行くのは不安だけど。」
ライバーの質問にランスが少し寂しげに答えた。

「なんで兵士になるんだ？このまま村にいてもいいじゃないか。」
「僕が兵士になる理由か・・・村の皆を守りたいから。」
ライバーの質問にランスが少し考え答える。
「それじゃ村に居ればいいじゃないか！」

「僕は思ったんだ。もし仮に村に居て村を守ったとしても
敵がいなくならない限り村は守れない。

だから兵士になって敵を倒すんだ。」
ライバーが力の入った言葉で言うと、ランスが冷静に説明する。
そしてライバーが溜息をつくと

「そうか。そうだな。君はそういう奴だよ。」
「だから最後の思い出に君と戦いたいんだ。」
「いいぜ。来いよ！」
二人が槍を出す。

「君も槍使いだったな。昔からどちら強いかよく争った・・・」
ランスが今まで振り返りながら言う。

「どちらも互角・・・勝負は決まらずに終わったこと多かった。」
それを聞いたライバーが今までの事を話した。

「勝っても・・・・」
ランスが言いかけると
「次の戦いで負けてしまう。」
ライバーがランスの言おうとしていた事を言った。

「そんな事の繰り返しだったな。」
ライバーが懐かしみながらも言う。少しだけ彼は笑顔だ。

しかし二人とも真剣な顔になり、
「「でも今日こそは決める！」」
と二人が同じタイミングに叫んだ。

その時、風が吹いた。その風で木の葉が落ち二人の間に落ちた。

その瞬間、ランスが斬り掛かった。

ライバーがランスの斬りを避けランスを突こうとする。
そして二人の槍が重なり押し引きあう。

「相変わらず強いね！」
とランスが槍に力を込める。

「当たり前だ！」
ライバーの言葉と共に槍を弾き返す。

「くっ。」
ランスが言葉を漏らす。
ランスはライバーを突こうとするが、
ライバーはその槍を避け、ランスを突こうとする。
それ受け止めたランスはライバーの槍を弾き返し、すばやく攻撃を繰り返す。
その素早い攻撃を避けると、ライバーが大きくジャンプしランスと距離を取った。

「これはあんまり使いたくなかったけど仕方ねぇ！」
「何を使うつもりだ？」
ライバーがぎりぎり追い詰められた表情で言うと、ランスが問う。
ランスの問いを無視し、ライバーが喋った。
小さい声なので何を言っているかは分からない。

「これでも喰らいな！」
ライバーが気合の入った言葉で言うと、
ライバーの槍を持つ反対の手に一つの球ができた。
球は赤く、燃えていた。
それをライバーはランスに向かって投げた。

「危ない！」
と言ってランスは球を避けたが、右腕に掠っていた。
ランスの避けた玉は木に当たり、木が燃えたが火は広がらなかった。

ランスが右腕を押さえながら
「熱い・・・何なんだ？今の燃えた球は？」
と苦しげに言い、ライバーに問う。

「ふん。秘密だ。」
ライバーが鼻で笑い言う。

「しかし俺の作った球を避けるとはやるじゃないか。」
「これで最後だ！」
ランスが叫ぶように言うとランスはライバーに向かって走り
ライバーの方向に槍を向け突っ込んで行く。
チッとライバーが舌を鳴らし防御の姿勢に入る。
そしてライバーは槍を受け止めた。
だがランスの力の方が強く、槍は飛んでしまった。
しかしランスは槍を止められずにライバーを斬ってしまった。

「ぐはっ。本気もいいけどちょっとやりすぎだ。」
と言葉と共にライバーは倒れる。

「少しやりすぎたな。」
とランスが反省を含めたような声で言った。

第二話「決着」（後書き）

またキャラの紹介をします。
ライバー
１７歳
身長１６２ｃｍ
気分がままに動く性格。文句などが多いが根はいい人。
ランスから見ると、小さい頃からライバルであり、親友である。
好きな事は修行。嫌いなもの悪い事。
槍使いでありライバーと互角の力を持つ。

読んでいただきありがとうございました。

第三話「再戦」

「こういう時は回復剤だ！」
ランスが思いついたかのように言う。
そして倒れたライバーの近くに寄り槍を抜いた。
ライバーは服のポケットからビンを取り出した。「回復剤」と書いてある。
回復剤のビンを開け中身の液体をライバーの口に入れる。
その瞬間ライバーの傷が治った。

しばらくしてライバーが目を覚ました。
「ここは？森か。」
起きたライバーがそう言う。
「そうだ。」
ライバーの言葉にランスが答えた。
「負けてしまったんだな。くそっ。槍だけはお前より上だと思っていたのにな。」
「偉そうに言わないでくれ。ライバーだって強かったよ。」
ライバーの怒り混じりの言葉にランスがフォローするかのように言う。
「まぁ仕方ないな。兵士になるんだからな。」
「そうだよ。こんな所でライバーに負けてたら戦場で死んでしまうよ。」
ライバーの納得するかのように言いランスがそれに同感するかのように言う。
「ははは。そりゃそうだな。」
とライバーが言った瞬間、魔物の咆哮が聞こえきた。

二人は槍を持ち構えた。

そして魔物が飛び出してきた！
恐竜のような魔物だ。腕にいかにも切れそうな爪、硬そうな尻尾、口の中には鋭い牙がある。
「どうやらこいつがこの森のボスみたいだな。」
「そうみたいだ。」
ライバーとランスが話していると魔物が突っ込んで来た。
二人を引っ掻こうと爪を振りましている。
それを軽々と避けるランスとライバー。
「攻撃をやめるなさそうだ。」
「んじゃ殺すか。」
ランスが深刻そうに言うとライバーがどうでもよさそうに言う。

二人は魔物を攻撃しようと突っ込むが魔物が尻尾で攻撃しようとしてくる。
「おお！あぶね！」
ライバーが避け、ランスも避けた。
魔物は爪でライバーを攻撃しようとするが
「無駄だぜ！」
魔物の攻撃を避け
「これでもくらいな！」
とライバーの大声と共に魔物の悲鳴が聞こえる。
ライバーが魔物を刺していた。
「やるねライバー。僕も負けられないよ。」
ランスがそう言うとランスは走り出した。
しかし魔物が口を開け
「もしかして・・・避けろランス！」
「え？」
ライバーが大声で言うとその瞬間、魔物の口から火が出た。
ランスは火の中に消えていった。
「ランスーーーーーーーー！」

魔物の口から火が出なくなると火を吐いていた場所にランスの姿はなかった。
それを見たライバーの顔には笑みがあった。
その瞬間、魔物の顔の上にはランスがいて
「喰らえ！」
魔物の顔に向け槍を向け、そのままランスは突っ込んでいく。
魔物の顔に槍が刺さった瞬間、魔物は悲鳴をあげ倒れた。
何が起こったかというと火が来る瞬間にランスは高く飛び
火を避け、魔物の顔の上に行ったのだ。
「死んだか？」
ライバーが魔物に近寄ると魔物が咆哮をあげて起き上がった。
「まだ生きているのか！」
ライバーが驚いている。
「仕方ない。あれをやろうライバー。」
「分かった。」
ランスとライバーは魔物に向かって走り出す。
ランスとライバーがジャンプし魔物を挟んだ。
「これでも喰らえ！」
二人の声が重なる。
ランスとライバーが魔物に槍を向けそのまま魔物に突っ込む。
二人は地面に落ちていく。
槍は魔物に刺さり魔物が倒れる。
「どうだ！？」
ライバーが倒れた魔物に近寄る。

第三話「再戦」（後書き）

次話をお楽しみに。

第四話「出発」

「大丈夫だ死んでいる。」
とライバーが魔物を見て言っている。
「ふう、恐ろしいよ。魔星戦争で使われた魔物がまだいるなんて。」
「確かにな。たぶん、今戦った奴はこの森の主だろうな。」
ランスが溜息をつきながら言い、ライバーが確認するかのように言い、思った事を言う。

「そういえば異間って見ただけで分かるのかな？」
「さあ？俺も見たことないし。本によれば、見た目は人間と変わらないらしい。
戦闘力がすごい高いらしいけど、でも戦闘力を上げるには方法がいるらしいぜ。」
ランスが疑問に思うとライバーがは自分の知っている事を話した。

「そうなのか。でも異間だから差別するのはだめだと思う。」
「同感だ。強いんだろ。その力さえ正しい事に使えれば構わないと思うぜ。」
ランスが意見を言うと、ライバーも意見を言った。

「・・・」
「・・・」
しばらく静かな時が流れた。

「さて帰るか。」
「そうだな。もうこんな時間だな。」
ライバーが突然言うと、ランスが空を見ながら言った。
空はもう茜色に染まっていた。

二人は歩き出した。
二人がガイン村に着いた頃にはもう夜だった。
村に着いた瞬間、ランスが口を開けた。

「ずいぶん遅くなってしまったな。」
「仕方ねぇだろ。魔物との戦い、多かったからな。」
とランスが嘆くように言うと、ライバーが怒ったような顔で言う。
二人は村に帰ってくるまでの間、多くの魔物と戦ったのだ。
二人は再び歩き出した。

「魔物は夜行性だからな。」
「そうだな。おっ気づいたら俺の家の前だ。」
ランスが一言、言うとライバーが驚いた顔をして言う。

「それじゃ。」
ライバーがそう言って家のドアを開けようとすると

「明日、見送り来いよ。」
とランスが言うと

「行くに決まってんだろ。馬鹿。」
ライバーが小さい声で言い、家に入っていった。
ランスは小さく笑った。

ランスは家に着いた。
「ただいま。」
「おかえり。」
ランスが笑顔で言うと、ランスの父が無愛想な顔で言う。
ランスの父は机の上で槍の刃の部分をハンマーで叩いている。

「めし、できてるぞ。」
「いただきます。」
ランスの父が冷たく言うと、ランスが嬉しそうにご飯を食べる。

ランスがご飯を食べていると
「いきなり聞くけど、父さんは何故、僕が兵士になるの止めないの？」
とランスがランスの父親を見ながら言う。しかしランスの父は黙ったままだ。

ランスが首をかしげて、ご飯を食べ始めると、
「お前は兵士になりたいのだろ。
なるべくお前には好きなことさせてやりたいと思っている。」
とランスの父が顔を少し赤くしながら言う。

「父さん・・・ありがとう。」
ランスはご飯を食べ終わった。

「おやすみ、父さん。」
とランスが言うが、ランスの父は黙ったままだ。

ランスは自分の部屋に戻るとすぐにベットに入った
「ついに明日か。今日は早く寝よう。」
と言いランスは寝ようとするが、寝れなかった。
そしてベットから出て、窓の近くに行き、窓を開けた。
空には星が輝いていた。

「綺麗だ・・・」
とランスは言った。

「僕はこの空を守りたい。戦争でこの空が見れなくなったら、悲しい。
そう思っているのは僕、いや僕以外の人間、異間も思っているだろう。」
ランスは空を見つめながら言う。
「やっぱり僕は戦わなければならないんだ。こんなに綺麗な空が消えないように。」

そしてまだ太陽が上がる前にランスは起きた。
ランスは階段を静かに降り、家を出た。
家の隣に一つの墓があった。
クラアン、ここに眠る・・・と刻まれている。

「母さん、行ってきます。」
とランスが小さい声に言うと、そこを離れようとすると

「待てよ!」
「こっそりと行くとは勝手だ。」
ランスが振り向くと、そこにはライバーとランスの父がいた。
ライバーがランスに近寄る。

「俺にぐらいには言っていけよ。親友だろ俺達。」
「ライバー・・・君こそ僕の誇りだ。」
ライバーが大きい声で言うと、ランスが泣きそうな顔で小さい声で言う。

「そんなこと言うんじゃねえ。また会えるんだからよ。」

「そうだな。君こそ死ぬんじゃないよ。」
「誰に言っているんだ？もしかして、俺に言っているのか？」
ライバーが寂しそうな顔で小さい声で言い、
ランスが慰め、少しふざけた顔をして言うと、ライバーが胸を張って言う。

「受け取れランス！」
とランスの父が言うと、ランスの父が何かを投げた。
「これは槍！？」
持つ場所は木で作られており、刃の部分は輝いていた。
太陽も出ていない暗い早朝に光を放つ槍だった。
ランスはその瞬間、昨日の事を思い出した。
ランスの父が机の上で槍の刃をハンマーで叩いていた事を。

「これも受け取れ！」
とランスの父が物を投げた。
ランスはキャッチして投げられた物を確認すると、鞄だった。

「役に立つ物が入っている。」
とランスの父が顔を赤くしながら言う。

「ありがとう父さん。」
とランスが言い、ランスがライバーの顔を見るとライバーは笑顔で返した。

「それでは行って来ます！」
とランスが言い、歩き出すと共に太陽が上がった。
そして今、一人の少年の運命の歯車が動き出した。

第四話「出発」（後書き）

やっとランスが旅立ちました。
よく考えたらこの四話ってプロローグですよね。
このこれまでの3話は世界観や歴史を知ってもらうために作りました。

第五話「運命の出会い」

「まずはルース村に行ってそこで泊まろう。」
ランスが一人で言っている。
まだ村から出てきて少ししか経っていなかった。
そこに魔物の咆哮が聞こえる。魔物は小さいドラゴンだった。

「魔物か。行くぞ！」
とランスが槍を構える。
魔物がランスを噛み付こうとして襲い掛って来るがランスは軽く避け魔物を槍で刺した。

「よし！」
ランスが腕を上げると地面に倒れた。ランスは空を見上げる。

「今日もいい天気だ。」
ランスが見上げている空は雲ひとつなかった。
しばらくランスは空を見上げていた。

「今日も空は綺麗だ。」
とランスが嘆く。

「さて出発するか。」
とランスが言い、再び歩き出した。

ランスがルース村が着いた頃にはは夕方だった。
ルース村は人にガイン村より人が多かった。
宿屋、武器屋、道具屋などの店があった。
人の中にはお爺さんや小さい子供などたくさんいた。

「ルース村も久しぶりだな。」
とランスが嬉しそうな顔で言う。ランスは宿屋向かって歩き出した。
その瞬間
「どこみて歩いてんだ糞ガキが！」
とランスは言われてしまった。人とぶつかってしまったのだ。
ぶつかった人は灰色のスーツを着ておりサングラスをしていた。
横に同じ格好をした人が二人いた。

「すみません・・・」
ランスはすぐに謝った。ランスとスーツを着た男達の周りは人がいなかった。
村人達が小さい声で話しているのがランスには分かった。

「すみませんで済むなら自衛団はいらねぇんだよ！」
とスーツを着た男にランスが顔を殴られた。

「けっとっとと失せな！」
倒れているランスにスーツを着た男が暴言を吐いていくと
スーツを着た男は歩いていった。
ランスにおばあさんが寄っていった。

「大丈夫かい？」
とおばあさんがランスに聞いた。
「ご心配なく。これくらい大したことないですから。」
「そうかい。あの男何者かねぇ？村のもんでもないのう。」
ランスが笑顔で答えると、おばあさんが安心したかのか息を吐いた。

「それでは。」
とランスが歩きだすと、宿屋ではなくスーツの男が行った方向へ行

った。

スーツを来た男ルースの村の森に入っていった。
ランスが森に入り、歩いていると

「本当にこれで開放してくれるんだな？」
「もちろんだ。お前が妙な真似さえしなければ。態度しだいで死ぬぞ。」
スーツを着た男が誰かと話していた。
スーツを着た男は見えるがもうひとりの話している人は木が邪魔で見えない。
ランスは何かを感じた。

「この声、どこかで？」
とランスが小さい声で言う。

「俺に手を出すの構わないがもし仮にあの人達の身に何かあったら許さねぇからな。」
「そんな口を利いていいのか？お前の大事なものは我らの手の中にあるんだぞ！」
もう一人の人が怒鳴ると、スーツを着た男がもう一人の人を殴った。

「て、てめぇ！」
「おっとそんな事をしていいのか？」
もう一人の人が手を出そうとしたのかもしれないが、スーツを着た男が脅していた。

「それでは良い報告が入ってくるのを楽しみにしているぞ。」
「くっ。」
スーツを着た男が挑発するように言うと、もう一人の人が苦渋の声

を漏らす。
スーツを着た男は奥に入っていった。もう一人の人は村の方へ戻っていった。
ランスはスーツを着た男を追った。

森を抜けるともう夜になっていた。
森を抜けた場所には川があった。そこにはスーツを着た男達と一人の女がいた。
ランスはスーツを着た男達と女を見ていた。

「なんですか？あなた達は！？」
「女！お前は兵士か？」
女がスーツを着た男達に睨みながら言うと、スーツを着た男が挑発するように女に聞く。

「そうよ。フウジ帝国騎士団スミス隊リアリーよ。」
「なら死んでもらおう！」
女ではなくリアリーが紹介をすると
スーツを着た男達がポケットから小さいナイフを出しリアリーを刺そうとした。
リアリーは驚いた顔をしながら避けた。

「何をするの！？」
「見れば分かるじゃねえかあんたを・・・」
ズサっ
「殺・・・・す。」
スーツを着た男は倒れた。
スーツを着た男には斬られた後がある。
「てめぇはぶつかってきた糞ガキか！？」
もう一人のスーツを着た男がランスを見ながら言う。

ランスはリアリーが攻撃を避けた瞬間に飛び出し
スーツを着た男を槍で斬ったのだった。
「てめぇ！」
とスーツを着た男が斬りかかって来たが
「これでも喰らえ！」
とスーツを着た男の攻撃をジャンプで避け、男の後ろに回った。
そしてランスは男に槍を刺した。
「くそっ・・・・」
とスーツを着た男が言い倒れた。
「やるではないか。しかし我を倒す事は不可能だ。」
スーツを着た男の中で一番冷静だった男がナイフを出した。
「戦いの結果はしてみなければ分からない。」
とランスが槍を構えながら言う。

先制攻撃はランスだった。
「喰らえ！」
ランスが槍でスーツを着た男を刺そうとするが
「そんな攻撃が我に当たるとでも思ったか？」
とスーツを着た男が言うとジャンプをし
「くたばるが良い。」
と言いながらスーツを着た男がランスを刺そうとするが
ランスはぎりぎりしゃがんで避けた。
ランスはスーツを着た男の足を刺そうとするがジャンプして避けられた。
「これが貴様の力か。我は呆れた。」
「この人、強い・・・」
スーツを着た男が高笑いをしながら言う。
ランスが小さい声で言う。
「なんとかしないと。う～ん。あ！あれを使う手があったわね。」

リアリーは手を叩いた。何か思いついたようだ。
「どうしたこの程度か？」
「まだまだ！」
スーツを着た男が笑みを浮かべながらランスに言った。
ランスはもうやけくそになっている。
スーツを着た男を攻撃をしようと無茶苦茶に槍を振り回している。
男はそれら全てを余裕で避けている。
ランスは無茶苦茶に槍を振りましている内に足が滑り転んでしまった。
スーツを着た男は笑みを浮かべ
「貴様との戦い、なかなか面白かったが
邪魔をするやつ処理しなきればいけない。」
とスーツを着た男がナイフを構える。
「くっ。」
ランスが悔しそうに言う。
「さらばだ！」
スーツを着た男が笑みを浮かべながらナイフを下ろした。
ランスは目を瞑った。その瞬間
「ファイアーショット！」
と言う声が聞こえた。ボッという音が聞こえた。
ランスは恐る恐る目を開けるとスーツを着た男が倒れていた。
「何があったのだろう？」
ランスはそう言うと倒れた。

第五話「運命の出会い」（後書き）

これからも更新していきます。
更新の感じは
Ｇｌｏｒｙを２話書いたらＤａｒｋを１話書くという感じです。

第六話「第一歩」

「ここは？」
ランスはベットの上に居た。
ランスが寝ている部屋は大きな窓があり、そこから入ってくる太陽の光が眩しい。
机があり、勇ましい男の絵が飾ってある。

「おかしいな。
確か、スーツを着た男に殺されそうになって
その瞬間ファイアーショットって聞こえて
スーツを着た男が倒れて僕が倒れたのだったはずだ。」
ランスは昨日の事を思い出した。
ドアが開いた。

「目覚めたみたいね。」
ドアから女が入ってきた。ランスが昨日、助けた女だった。

「あなたは・・・確か昨日の。」
「ええ、そうよ。昨日は助けてくれてありがとう。」
ランスは頭を触りながら言う。それに対しリアリーは軽く頭を下げた。

「あの・・確かリアリーさんですよね？」
「そうよ。改めて紹介させていただくわ
フウジ帝国騎士団スミス隊リアリーよ。」
ランスが思い出しながら言った。リアリーは自己紹介をした。
「やっぱり騎士団の方だったんですね。
リアリーさんお願いがあるんですが。」

「お願い？私にできることならするけど。助けてもらった身分だし。」
ランスがリアリーの顔色を伺いながら言う。リアリーは首を傾げながら言う。

「あの僕を兵士にしてもらえませんか？」
「兵士？確かにあなたの槍の腕は中々だけど・・・」
ランスが頭を下げながら言う。リアリーは少し驚きながら言った。

そしてリアリーがちょっと考えた後
「ちょっと外に出てもらえない？」
「え？あ、良いですよ。」

そして二人は宿屋の裏に来た。

「あなた・・・と呼ぶのも失礼ね。
名前を教えていただけないかしら？」
「あっすいません。自己紹介がまだでしたね。
ランスです。ここから近くの村から来ました。」
ランスが自己紹介をした。

「ランスさんで良いのね。」
「はい。でもさん付けしないでください。」
リアリーが確かめるとランスは首を縦に振って答えた。

「ならお言葉に甘えさせていただくわ。改めてよろしくランス。」

リアリーの笑顔が眩しかった。しかしリアリーがいきなり真顔になると

「兵士に何故なりたいの？中途半端な意志では死ぬわよ。」
「僕は目に見える敵よりも見えない敵を倒したいのです。
そして皆が平和で生きていけるとうにしたいんです。」

リアリーは首を傾げた。ランスの言葉の意味が分からなかったようだ。
「あ、分かりにくいですよね。う～ん・・・あ！
あなたがもし戦うとしたらたくさんの人ですか？それともその人達を指示する人ですか？」
「それなら指示をする人ね。あ、今分かったわ。」

リアリーは分かったようだ。

「さて本題に入るわね。あなた、マホックは使える？」
「ま、まほっく？」
リアリーが当然とした顔でランスに聞く。ランスは驚いた顔をしている。
ランスはマホックって何だろう？と思っていた。

「もしかして・・・マホックを知らないの！？」
「え、知ってないとまずいですか？」
リアリーは驚いていた。ランスは頭の上に？マークが出そうなぐらい疑問に思っていた。

「知らないのね。驚いたわ、そんな人がいるなんて。」
「マホックって何なんですか？」
リアリーが一息つくと

「マホックと言うのは火を出したり、人を治療したりする物よ。」
「火を出す！？そんな凄い事ができるんですか！？」

「そんなに顔を近づけないでちょうだい。」
ランスは驚いてリアリーの顔を見ていた。

ランスは思い出した。ライバーとの戦いを

「これはあんまり使いたくなかったけど仕方ねぇ！」
「これでも喰らいな！」
ライバーが気合の入った言葉で言うと、
ライバーの槍を持つ反対の手に一つの球ができた。
球は赤く、燃えていた。
それをライバーはランスに向かって投げた。
「危ない！」
と言ってランスは球を避けたが、右腕に掠っていた。
ランスの避けた玉は木に当たり、木が燃えたが火は広がらなかった。
ランスが右腕を押さえながら
「熱い・・・何なんだ？今の燃えた球は？」
と苦しげに言い、ライバーに問う。
「ふん。秘密だ。」

そんな事があった事を思い出した。

「ライバー、君は知っていたのか。」
とランスがつい嘆いてしまった。

「え、何？ライバー？」
「あ、いや何でもないです。」
「ランスはマホックは使えないのね。」
リアリーは落胆していた。

「マホックを使えないと兵士になれないんですか？」

「そんな事はないけれどなれる確率は随分と減るわ。」
「そんな！何とかできないのですか？」

ランスがリアリーの肩を掴みながらリアリーを揺らしている。
「まだ決まったわけではないわ。私から隊長にでもお願いしてみるわ。
隊長は実力派ですからね。」
「ありがとうございます。」
ランスは礼をした。

「さてフウジ帝国に向かいましょうか。」
「そうですね。」
ランス達は村の入り口に向かって歩き出した。

そしてランス達が村を出ようとした瞬間
「おらおらてめーら！」
と斧を持った男達が入ってきた。
村人達が隠れる。

「何ですか？あれ。」
「山賊よきっと。」
ランスとリアリーが小さい声で話す。

「村人達よ！食材をよこせ！」
村人達は震えながら食材を渡す。
おじさんが食材を渡すと
「これでよろしいんですよね？」
「だんだん減ってきたな。」
「そ、そんなこれ以上は・・・」
「黙れ！」

と山賊が言うとおじさんを殴った。それを見ていた女が一人出てきた。
青色の髪でツインテールだ。服は赤色の服を着ており真ん中にラインが入っている。

「ちょっとあんた達いつまでこんなことするつもりよ！」
「なんだとこの女！」
と山賊が女を殴ろうとしたが、女は容易く避けてしまった。
そして山賊の腹を殴った。山賊は腹を手を押さえながら倒れた。

「こいつみたいになりたくなかったらとっと帰りな！」
と女が山賊を睨む。山賊達が少し後ずさる。しかし
「そんな事を聞くと思ってるのか？」
と一人の男が出てきた。今さっきでてきた山賊とは違い強そうだ。
「黙りなさい！」
と女が男を殴ろうとするが手で受け止められてしまう。
「何だ大した事のない女だな。」
と男が言い、女の腹を殴り気絶させた。
「聞け！村人共！最近、食料が減ってきている。
俺らの中でも食料の奪い合いが起きている。そうだ、この女を切って食べちまおうかな。」
山賊はわざとらしく言った。
村人達は驚いている。

ランスは飛び出そうとしたが
「やめなさい。」
とリアリーが止めた。

「何故ですか？」
とランスが怒りながら言う。

「後で話すわ。」
とリアリーが冷静に言った。

山賊が女の髪を持ちながら言う。
「さてどうするこの女を食べられるか、お前らの食料を減らすか？
どっちにする？」
と山賊が言うと村人達はざわめきだした。

「メリカちゃんには世話になっているけど。」
「でも俺らの食料なくなるのもいやだな。」
「俺は食料派。」
「あたしも食料派だよ。」

山賊が
「どうやら決まったみたいだな。」
と言った。

第六話「第一歩」（後書き）

マホックは魔法みたいなものです。
マジックと魔法を混ぜて言うとマホック、なのでこの名前にしました。
人物紹介をさせていただきます。
リアリー
１９歳
何事も冷静に捉える性格。優しく、いつも人の事を考えている。
フウジ帝国の騎士である。マホックを使い戦う。

第七話「難しい選択肢」

「お前らの意見としては・・・食料を取ると言うことでいいんだな。」
と今さっき女を気絶させた山賊が笑いながら言う。
「この女は俺達がかわがってやるから安心しろよグへへへへ。」
横から山賊が出てきて、嫌味に笑っていた。
「それじゃあな。」
山賊は出て行った。
ランスがリアリーの手を無理やり離すと
「どうしてなんですかリアリーさん！」
ランスがリアリーを揺らしながら言う。
「今、トラブルを起こすわけにはいかないの。
私達は一秒でもフウジ帝国に早く帰らなければいけないの。」
リアリーが冷静に答えている。
「でも！」
「ならどうするの？この村を助ける、兵士になるの？」
「それは・・・」
ランスはしばらく考えこんでしまった。
「リアリーさん。先に行っててください。必ず追いつきますから。」
ランスが覚悟を決めたというのが顔を見ればよく分かった。

「そう。なら先に行かせてもらうわ。」
とリアリーが言うと歩いて行った。

「山賊のアジトの場所を聞こう。」
とランスが独り言を言った。
ランスが近くにいたまだ怯えているおじさん所に行った。

「すいません。」
「な、何か用か？」
おじさんが震えながら言う。
「今さっきの山賊について教えていただきたいんですが。」
「あれはグレトル山賊だよ。
魔物から村を守ると言いこの村にいる。代わりに食料を奪っていくのさ。
でも前、大きいドラゴンの魔物が来て、呼んだんだがすぐに逃げっていってしまった。」
おじさん震えがやっと止まった。

「何処に住んでいるとか分かりませんか？」
「さあ？でも村長だったら知っていると思うけど。」
「なら村長さんの家を教えてくれませんか？」

ランスはおじさんに教えてもらった村長の家の前に来ていた。
ランスが家のドアをノックした。

「入れ。」
「お邪魔します。」
部屋にはいるとイスにおじいさんが座っていた。どうやらこの人が村長のようだ。

「何か用か？」
と村長が威圧的に言うと、
「グレトル・・」
とランスが用件を言おうすると
「関わるな！」
と村長が怒鳴った。ランスは驚いていた。
村長は一息つき、
「見たところこの村の住民じゃなさそうだな。旅の人か。」
「まあそんな感じです。」
「どうせグレトル山賊の住処でも聞きにきたんじゃろ。帰れ！」
また村長が怒鳴った。

「何故ですか！？僕は人を・・」
「お前さんにみたいにグレトル山賊を倒そうと中途半端な覚悟で行った者が何人も帰ってこないんじゃ。これ以上悲劇を繰りかしたくないんじゃ。」
「僕は中途半端な覚悟じゃありません！」
ランスが怒鳴った。

「すいません。」
すぐにランスが謝った。
「僕はメリカさんを助けたいんです。」
「メリカ！？あの子がどうかしたのか！？早く言え！」
村長がランスの肩を揺らしながら言う。
「落ち着いてください。何故そんな必死なんですか？」

「メリカはわしの娘じゃ。死んだ母さんとの子じゃ。」
「そうだったんですか。実は・・・」
ランスは村であった事を説明した。

「そうか、頼むメリカを助けてくれ。欲しいもんをなんでもくれてやる。
なんならメリカを嫁にしてもいいぞ。」
「何もいりません。」
「本当か？」
「本当です。」
「本当にいらないんじゃな？」
「本当にいりません。」
「メリカを嫁にする権利もか？」
「そんな権利要りません。」
「そんなとはなんじゃそんなとは！メリカは美人で・・・」
と村長が言おうとすると

「早く山賊の住処を教えてくれませんか？」
とランスが怒りながら言う。ランスから赤いオーラが見える。

「すまんすまん。山賊の住処はな・・」

ランスが村長の家から出てきた。
「よし明日の朝に奇襲をかけよう。」
とランスが行った。

「今日は村の外で野宿だ。」
と言ってランスが歩いて行った。

その頃リアリーは

とある森の中
「本当に来ないのね。」
とリアりーが歩きながら言う。

「・・・」
「甘いわね。私も。」
とリアりーが言うと来た道を引き返した。

第七話「難しい選択肢」（後書き）

では人物紹介をします。

村長

ルース村の村長。前、山賊に妻を殺された。

それがトラウマとなり山賊に従うしかないと思っている。

メリカをかなり大事にしている様子。

第八話「奇襲」

ランスは山賊のアジトの前まで来ていた。
「見張りがいるのか。」
入り口には二人の見張りがいた。斧を持っていて強そうだ。
ランスは見張りにばれないように木に隠れていた。
「仕方ない。」
とランスが言うと槍を構えた。
ランスが見張りの所へ飛び出した。ランスは槍を振り、一人の見張りを倒した。
「な、何者だ？」
山賊が怯えながら言う。
「あなた達を倒しに来た者です。」
「なんだと。死ね！」
見張りが斧を振るとランスが避けた。そしてランスが槍で見張りを倒した。
ランスがアジトに入るとたくさんの山賊がいた。しかし寝ていた。
周りに酒の瓶がたくさんが転がっていた。
「メリカさんは何処だろう？」
とランスが辺りを見回すと縄で縛られている女がいた。メリカだった。
ランスはメリカを見つけると走っていった。

そしてランスが縄を斬る。

「メリカさん、起きてください。」
とランスがメリカの肩を揺らす。

「う、う～ん。」
メリカが目をさました。メリカがランスの姿を見ると
「きゃあ！」
と悲鳴を上げてしまった。

「うん？何だ？」
と山賊の一人が起きてしまった。

「仕方ない。」
ランスが槍を構え、山賊を刺した。

「ぐあああああ！」
と山賊が悲鳴を上げた。メリカの悲鳴よりも大きかった。
寝ていた山賊がだんだん起き出した。

「何だ？どうした？うお！」
「女が逃げているぞ！それと知らない男だ！」
山賊がランスを指で指しながら言う。

「あんた、誰だい？」
メリカがランスに聞いた。

「ランスです。あなたを助けに来ました。」
「あたしはメリカ。まずこの山賊を倒さなきゃね。」
「そんな、先に逃げてください。」

「あら、あたしを舐めないでくれる？あたしのの強さ知らないの？」
とメリカが腕を伸ばしながら言う。

「ちょっと見ときな。」
と言うとメリカが山賊の腹を殴った。

「うぐっ。」
と山賊が言い倒れた。

「この女！」
と言い山賊がメリカに襲いかかって来た。

「邪魔。」
とメリカが襲ってきた山賊の顔を蹴った。
山賊は顔を押さえながら後ろに倒れた。

「す、すごい。」
ランスが驚いている。

「女だからって甘く見ないでよね。」
メリカが怒っている。

「それでは僕はここのボスを倒すので。」
とランスが言って歩いていこうとすると

「待って。あたしもいくわ。」
「そんな、危ない。帰ってください。」
「あたしをなめないでくれる！」
「分かりました。ですが危ないと思ったらすぐに逃げてくださいね。
」

「分かったわよ。」

二人はボスがいるかと思われる場所の前まで来た。
わざとらしく王座などが置いてある。どこから持ってきたのだろうか？
二人、壁で隠れている。

「はぁはぁつきましたね。」
「さすがに疲れたわね。」
二人が息を切らせながら言う。

この山は高く、最上頂まで登るまでかなり苦労する。それでもって山賊がいるので、山賊とも戦わなければならない。

「そこに隠れている者！出でこい！」
といきなり声が聞こえた。

「ばればれのようね。」
とメリカが出ていった。それにランスがついていった。
王座の前に男が立っていた。昨日、メリカを気絶させた男だ。

「お前は昨日の娘か。」
「その節はお世話になったわね。」
とメリカが指を鳴らしながら言う。

「何故、あなたはこんな事をするんですか？」
ランスが男に問う。

「ふん。私は私の好きにするだけだ。貴様らの事情など知ったことは無い。」

男が偉そうに言う。

「やはり、あなたとは戦わなければいけなんですね。」

「さて昨日の仕返しさせてもらうよ！」

「来るがいい。結果は見えているがな。」

今、戦いが始まろうとしていた。

第八話「奇襲」（後書き）

更新が二ヶ月ぶりです。
すいません。

第九話「山賊首領との戦い」

「さあ行くわよ。」
とメリカが走っていった。
「来るがいい。」
と山賊首領が腰につけていた斧を出した。
「やあーーーー！」
といってメリカが跳び蹴りをした。しかし容易く避けられてしまった。
メリカは着地したが、着地したメリカを山賊首領が襲う。
斧を振ってメリカを殺そうとしているがメリカはそれを避けている。
それからも何度も山賊首領は斧を振るい、
「どうした。」
「くっ。」
と言ってメリカがついたところは壁だった。そして山賊首領はメリカの顔を斬ろうとした。
メリカはしゃがんで避けた。しかし攻撃を避けたことによってメリカは座ってしまった。
「さらばだ。」
「待て！」
と言ってランスが山賊首領に向かってジャンプして槍を向ける。
しかし山賊首領が右に避けられてしまった。
「やっと来たか。」
すぐさまメリカが立った。そしてランスの横に立つ。
「戦えますか？」
「聞く必要あると思う？」
ランスが心配しながら言う。メリカはランスの心配とは反対に笑みを浮かべている。
二人は山賊首領に向かって走って行く。最初に攻撃をしたのはラン

スだった。
「ぐっ。」
だがランスの槍は受け止められてしまった。そしてランスは飛ばされてしまった。
ランスはしりもちをついてしまった。
「つ、強い。」
ランスが苦渋をもらした。
「何人居ろうが、変わらん。」
山賊首領がランスの槍を受け止めながら言う。
「それはどうかしら！」
とメリカが山賊首領の顔殴ろうとしたが、山賊首領は顔を右に動かして避けた。
「ふっそれだけか？とんだ期待外れだっただぜ。」
「あの世に行く前の台詞、それで良いの？」
メリカはそれに対して連続パンチをした。
だが山賊首領は余裕の笑み浮かべながら避けている。
「何ですって！？これならどうよ！」
メリカが山賊首領の腹にパンチをした。
山賊首領が少し顔が歪んだが
「ぐっ。少しは効いたが無駄だ。」
と言うとメリカを斧を持っていない手で殴り、弾き飛ばした。
「きゃーーー」
とメリカが吹っ飛び、壁にぶつかった。
そこに山賊首領が歩いて行った。
「威勢は良しだが腕がまだまだ、だな。
貴様のように中途半端に強い者は可哀想だな。」
山賊首領がメリカを挑発している。メリカは、はぁはぁと息をついている。
無言でメリカが山賊首領を殴ろうとしたが、斧を持ってない手で受け止められてしまった。

「どうした？そんな程度か？」
山賊首領がメリカの腹を蹴った。
「うっ。」
「まだ死んでもらっては困る。貴様は私に逆らった事を後悔しながら死ぬのだ。」
そして山賊首領はメリカの腹を何度も蹴る。そのたびにメリカは悲鳴を上げている。
「やめろー！」
とランスが山賊首領に斬りかかるが斧を受け止められてしまった。
ランスは追撃をするが全て受け止められてしまう。さらに山賊首領の斧を左腕に掠った。
「ぐはっぁ！」
「邪魔だ。安心しろ貴様も後で殺してやる。」
山賊首領がランスを蹴り飛ばした。
ランスはまたしりもちをついてしまった。左腕を押さえている。
山賊首領はまたメリカを蹴りだした。
「雑魚が！雑魚が！雑魚が！！！」
と言いながら蹴っている。メリカの悲鳴も大きくなる。
その時バァン！と大きな音がした。ランスの方からだったからだった。
「てめぇいい加減にしねぇか。糞がっ！」
とランスが言った。普段の彼からは考えられない言動だ。
よく見ると彼の両手に謎の紋章が見える。
田と漢字の真ん中の縦と横の棒が伸びているようだった。
そしてランスが山賊首領に向かって走りだした。走った所に穴が開いていた。
ランスは山賊首領を斬ろうしたが、
「大したことはねぇな。今さっきまでの勢いはどこに行ったんだ？カスが！」
ランスが山賊首領の斧を飛ばした。飛ばされた斧は遠くに突き刺さ

る。
山賊首領は後ろに引いていた。そしてこけてしまい、しりもちをついた。
そこにランスが槍を向け、
「死ね。」
と小さく言い放つと、槍で山賊首領を見えない速さで突いた。
「ブロードレイン！」
「ぐは！」
血が舞っていた。突きがしばらくの間続いた。そして止まると、
「誰だ貴様は・・・」
「俺はデレント・・・」
ランスが喋りかけたところでランスが倒れた。
「なんて野郎だ。私をここまで傷つけるとは。」
と山賊首領が言うと血を吐いた。
「しかしこれで邪魔者はいない。天国へ送ってやる。」
山賊首領がメリカを見ながら言う。
しかしランスが目を覚ました。
「ひぃ！」
山賊首領が怯えている。
「僕は一体何を・・・」
「く、来るな！来ないでくれ！お願いだ、反省する。
もうこんな事はしない。助けてくれ！」
山賊首領が怯えている。
「やっとですか。では今そっちに・・・あれ？」
「どうしたのランス？」
「体が動かないんです。」
「なんだと！ふふふ今度こそ私の勝ちだ！」
山賊首領が斧を取ると、メリカのほうに歩いていった。
メリカに斧を振り下ろす準備すると
「今度こそ、終わりにしてやる。さらばだ！」

「やめろー！」
とランスが叫んだ。しかしランスの体は動かない。

第九話「山賊首領との戦い」（後書き）

書いてみて思ったんですが、
やっとましな小説が書けるようになってきた気がします。
ランスの事はこの先で分かります。
ではキャラクター紹介を。
山賊首領
３２歳
身長１８０ｃｍ
グレトル山賊の首領。荒く者にしては珍しく冷静だが
強い者を目の前にすると怯えてしまう。名前を知るものはいない。
斧の扱いに慣れている。

第十話「謎の力」

「ファイアーショット！」
と声が聞こえると、ひとつの火の玉が飛んできて山賊首領に当たった。

山賊首領が燃え始めた。ランスが火の玉が飛んできた方を見ると、リアリーがいた。
「熱い、助けてくれ！頼む！」
リアリーが山賊首領に近づいた。しかしリアリーは見ているだけだった。

「リアリーさん。水を！」
とランスが言ったがリアリーは動かない。

「頼む・・・助けてくれ・・・」
山賊首領が手を伸ばした。しかしリアリーは伸ばされた手を避けた。
メリカは驚いているのか口を開けたままだった。
山賊首領は倒れた。そして燃え尽きてしまった。
それをランスが見るとランスはやっと動いた。リアリーの方へと歩いて行った。

「どうして助けなかったのですか？」
ランスは怒っていたが、怒りを隠してリアリーに聞いた。
「栄光の道、邪魔する者、消してでも、歩け。これが私の隊の信条なの。」

リアリーが小さな声で答えるとランスが
「だからと言って人を殺してもいいんですか？」

と少し怒り混ざりの言葉でリアリーに聞いた。

「・・・」

リアリーは何も言わなかった。そこに、メリカが寄ってきた。

「ランス、あんた、今さっき力はなんだっただい？

普段のあんたからは信じられなかったわ。デレントって何よ？」

メリカが興味ありげにランスに聞いている。

「それが分からないんです。メリカさんが傷つけられいるのを見て、

怒りが湧いてきて。」

ランスが思い出している。そうするとリアリーが

「何かあったの？」

とメリカに聞いた。

ランスはまだ今さっきの事を思い出そうしているのか深い顔をしている。

「こいつの力が・・・てかあんただれ？」

メリカが説明していたがリアリーの顔を見た瞬間説明をやめた。

「紹介が遅れたわね。私はリアリー。フウジ帝国騎士団スミス隊に所属しているわ。」

「あたしはメリカ。ルース村、村長の娘よ。よろしく。」

二人とも自己紹介をした。

「さっき言おうとした事をもう一度い言っていただけない？」

「こいつ、ランスがいきなり強くなったのよ。あいつとは思えないくらい。」

メリカがランスを指指しながら言う。ランスは山賊首領の死んだ所を見ている。

「ここで話すもなんだね。村に戻りましょうよ。」
「そうしていただけると助かるわ。彼、落ち込んでいるみたい。」
とリアリーがランスを見ながら言う。ランスは俯いている。

「あっ。提案しといて悪いけど人を探さしてもらうわ。」
「誰かいるの？」
「村の人が何人か連れてかれているのよ。」
とメリカが歩いて行った。リアリーもそれについて行った。

しかしリアリーが一度振り向いた。
「ランス、行くわよ。」
「・・はい。」
とランスが走ってリアリーの所に行った。

ランス達はいろんな部屋を回った。しかし村の人々はなかなか見つからなかった。
「いないねぇ。もしかして皆・・・」
メリカが俯いた。それを見てランスが
「まだ全部回っていないじゃないですか。」
「そうね。まだ回ってないわね。」
メリカが嬉しそうに答える。

「この部屋、入ってないわね。」
リアリーがそう言い、ドアを開けるとその部屋には４つのベッドがあった。
ベッドの上には人が寝ている。

ランスとリアリーとメリカはベッドを見ると、それぞれのベッドの方に走った。

「だいじょうぶですか？」
ランスがベッドにいる人の体を揺すっている。
しかし、ランスはすぐに手を離した。そして手を合わせお辞儀をした。

「リアリーさん、メリカさん、そっちの人は大丈夫ですか？」
リアリーとメリカに声が聞こえると二人とも首を横に振った。

それ見ると、ランスは俯いた。しかしランスの視界にあるものが入ってきた。
もうひとつのベッドだった。ランスはベッドに向かって走っていった。
ベッドにおばさんがいた。高貴な服を着ている。ランスは体を揺すった。

「大丈夫ですか？」
そうするとおばさんは

「う、う。」
と声を上げた。ランスは声を上げたのを聞くと、
「二人とも来てください。」
ランスがそういうとリアリーとメリカが来た。

「この人、生きています。村まで・・・」
とランスが言おうとするとランスは倒れてしまった。

ランスが目を覚ますと以前来た宿屋のベッドの上だった。
隣のベッドにはおばさんが寝ている。

「ランス！目を覚ましたのね。」

リアリーがいた。

「驚いたわ。あなた三日間も寝たきりだったのよ。」
「僕が？」
「ええ。」
ランスは驚いていた。
今までそんな事は無かったからだ。
ランスが山賊首領と戦ってから三日も経っていたのだ。

「リアリーさんはフウジに戻らなくても良かったんですか？」
「ええ。隊長に手紙を出しておいたわ。」
ランスは周りを見渡した。ランスの視界におばさんが入った。

「そういえばおばさんはどうなったんですか！？」
「生きているわよ。なかなか体の状態が良くならないのだけど。
三日間一度も起きてないのよ。」

リアリーがそう言った瞬間、
「う、うん・・・」
とおばさんが起きた。二人とも驚いている。

「う、ここは？」
おばさんが周りを見回している。
「ここはルース村です。」
「ルース村？聞いたことがあるような・・・」
リアリーがおばさんに説明するとおばさんは不安そうな顔をした。

「あなた名前はなんと言うんですか？」
「私ですか？私は・・・」

第十話「謎の力」（後書き）

十話ですか、ここまで来たんですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4948h/

Glory Of Light

2010年10月22日00時00分発行